INTERVIEW

金利惠
風花を追う華麗な詩

写真 朝岡英輔
文 新井敏記

東京に生まれ韓国に渡った舞踊家金利惠が、この春俳句集『くりうむ』を上梓した。俳句集の扉には表題の一句が詠まれている。くりうむは花の奥またその奥へ韓国語のコリ呂（クリウム）とは愛おしさ、恋しさ、懐かしさを表す言葉だという。俳句の五七五は日本語の韻律だが、韓国語の重層的な言葉ならではの深淵な世界を金利惠は表現している

ここで少し句集『くりうむ』の著者金利惠の生い立ちのことを記したい。

金利惠は若くして韓国忠清道より渡日した両親のもと、一九五三年東京に生まれた。五歳よりバレエを習い、二十歳の時に在外国民学生夏季学校に参加し、初めて母国韓国を訪れた。この韓国滞在をきっかけにして「金子」という通称名を捨て本名の「金」を名乗るようになり、中央大学文学部卒業後にライターとして活動を始める。最初の訪韓の時に韓国伝統舞踊と出会い強い衝撃を受けた彼女は、自分の進むべき道は母国の舞踊と求め、重要無形文化財サルプリチュムの履修者として韓舞を数多く披露していく。サルは厄、プリは祓う、チュムは舞を表す巫舞として古くから伝わるものだ。

その伝統の一方、金は〝俳舞〟という日本と韓国をつなぐ新しい舞踊にも挑戦している。二十代半ばから未知の言葉であった韓国語を学び、母国韓国の音楽や舞踊の動きをなぞる日々が続いた。その頃は敢えて日本語を遠ざけていたと、彼女は述懐する。

俳句に出会ったのはそれから二十年以上後のこと、あるチャリティ公演の最後に日本人が歌う童謡「ふるさと」だった。高野辰之の詞「兎追ひしかの山、小鮒釣りしかの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷」――懐かしい旋律に乗る言葉からは優しい風を感じ、気が付くと金も一緒に声を合わせていた。

彼女は、歌いながら少女時代に誰もいない縁側で、分厚い歌集を膝において何時間も一人で歌ったことを思い出していった。彼女にとっては「ふるさと」は、原風景を表した母語であった。彼女は、チャリティ公演の実行委員長が主宰する俳句会に誘われた。俳句といえば日本の伝統詩だと思うだけで、金にはそれまで遠いものだった。小さな抵抗心が「ふるさと」を歌うことで消え、自分の言葉探しの旅が再び始まった。

俳句は五七五の韻律を詠む、自分の思いを最少の物語に込めていく定型詩だ。古い世界と新しい世界に向けて、金の創作が始まる。今までどう自分は生きてきたのか、そしてこれから自分はどう生きていくのか、客観的な観察も必要となり、俳句は自分の心の内をその先に向けて編む。

思いを繋ぐ五七五の韻律に、彼女の嗅いだ韓国の匂いや遠い日本の記憶が幾重にも重なった。日本と韓国は、最初は彼女の中では互いに引っ張り合い、退け合い、絡み合い、傷つけ合った。しかしその名状しがたい思いを句に詠むと、その思いは寄り添い、愛おしくあった。両方の世界は互いに寄りかかることなく立っていた。思えば俳句集の表題を日本語ではなく、「くりうむ」とハングルをそのままひらがなで表現したのも、彼女の意思の現れだった。一語で直裁に伝える韓国語も、三つの語を重ねる日本語も、どちらも美しいのだ。

好きな俳句がある。

風花を追って見知らぬ町に出る

句集『くりうむ』には句の説明は一切ない。最初に金の句に触れたのは、「中くらいの友だち」という同人雑誌の二〇二一年九月号だった。韓国を語らい、味わい、楽しむという季刊紙で、「はるゆやけ（春夕焼）」という春の季語をモチーフに金は六句ほど掲載していた。風花の句は、韓国に来てまもない頃に韓国語学校に通っていたことを詠んだものだ。年齢も国籍もバラバラな八人の生徒たち、小さな木の椅子を黒板を囲むように並べ、金たちは午前を過ごしていった。風花は晩冬の季語、晴れた空を雪がひとひらずつ舞い落ちてくることをいう。雑誌では〝見知らぬ街〟としたが、句集では〝見知らぬ町〟と修正されていた。街の語源は十字路から来ているという。道が交差するところ。町は区画を指す。もう少し小さなサイズを願い、金は親近を持って町と変えたのかもしれない。

小さきものすみれに語るときは母語

金の句の切々とした美しさは、悲しくも生きて新しい日本語に出会う喜びでもある。句を声に出して詠んでみる。そこに一歩ずれたリズムがあることを知る。

ひらひらと夢に火照りぬ酔芙蓉

秋の季語を持つこの句には、金利惠の真骨頂がある。たとえば「ひらひらと」という薄いものが軽く翻るように動くさまの副詞は、「ひ・ら・ひ・ら・と」という五拍だが、彼女は「ひら・ひら・と」と三拍で詠む。文字に現れない息継ぎは、韓国舞踊の十二拍が身体に染み込んだもので、それが独自の句に仕立て上げる。心で思うことが膨らんで言葉が紡がれて句になる。離れている分、日本語は浄化されて堅牢な生き方を支えていく。

句集『くりうむ』は四つの章から成っている。起・景・結・解、それぞれ韓国伝統音楽のリズムの基本を表すもの。「起こす」「展（ひら）く」「結ぶ」、そして「解（ほど）く」という意味を持つ四つの柱が息づかいとなり、舞となる。金の身体に沁みこんだリズムだ。

景の章に、金の大切な友人を詠んだ句がある。

風たちて彼女を連れてゆく驟雨

句には〝李良枝逝く〟と前書が添えられている。在日韓国人二世で三十七歳の若さで急逝した作家李良枝への追慕。金利惠の終生の友として、李良枝はいた。自分の言葉を探すのではなく、自分のことを表す言葉を探す李良枝。彼女は、一九五五年在日韓国人の両親のもと山梨県に生まれる。早稲田大学在学中に伽倻琴と韓国舞踊を習い、ソウル大学国語国文学科に入学し、小説『由熙』で第百回芥川賞を受賞した。この句は驟雨の無情を嘆く慟哭のような悲しみが聞こえる。

「母語は母親の胎内にいる時から聞こえている言葉だ」と、金は言う。「自然に習い覚えた最初の言語だ」と。

「私の思考、表現を作り、私という人を作った日本語だ」と続ける。そして韓国語は「これからの私を創っていく」と言う。

ある意味、句は金が人々の墓標に刻む言葉でもあった。今までこのように生きてきた。まるで相貌を語るように金は家族をそして友人をここに送る。死者を語る時、短い研ぎ澄まされた言葉こそが情念を語ってくれる。母、父を思い、そして祖父母を思う。大切なことは繰り返すことであると『くりうむ』は教えてくれている。

最後に親交のあった坂本龍一への追悼が二句添えられている。それはここには記さず、句集を手に取り、詠むことを読者に勧めたい。

金利惠　一九五三年生まれ　韓国舞踊家、主な著作に句集『くりうむ』（コールサック社）、『風の国 風の舞』（水曜社）がある。今秋刊行予定に『私のソウルものがたり』（ハザ）がある。夫は韓国伝統芸能「サムルノリ」の金徳洙

記事転載を許諾済み　2024年６月号 SWITCHより
出版社スイッチ・パブリッシングオンラインストア
https://www.switch-store.net/hpgen/HPB/shop/business.html